

ワルターの宗教性について

西田, 越郎

<https://doi.org/10.15017/2332901>

出版情報 : 文學研究. 50, pp.55-64, 1954-12-25. 九州文学会
バージョン :
権利関係 :

ワルターの宗教性について

西 田 越 郎

中世の代表的抒情詩人 Walthar von der Vogelweide の数多
ら作品を通観すると、われわれはオットーの治れるような豊かと
と多様性にと驚きの目をみはらざるを得ない。作品の題材の点か
らいって、恋愛詩・政治詩あるいは宗教詩となはれた多岐にわ
たりついで、むしろ維多クトル・フーテンが印象する受けるのである。
ワルターが皇帝からの米価を願ひんことを願つてつたつた
Bittspruch (28.1. Lachmann) のなかで

Von Rôrne vogt, von Pülle küneç, lât iuch erpârennen
daz man niçh bi sò rîcher kunst lât alsus ârnen.
gerne wolde ich, môchte ez sin, bi eigenem fiure
[erwârennen.

zâhin wiech danne sunge von den vogellînen,
von der heide und von den blumen, als ich wilent
[sanc!

と、自分の生活の安定が確保されたならば、また喜びかつてのや

うたミンネザングをうたうたうと言ふ、あつたはれた、恐むく
最も晩年に近い作と思われる 66.21 (Hans Bôhm はこの作品で
Vernâchtnis なる標題を与えてゐる) の、

Ir reinen wîp, ir werden man,
ez stêt alsô daz man mir muoz
êr unde minneflichen gruoç
noch volleclicher bieten an.
des habet ir von schulden groezer reht dan ê:
welt ir vernemen, ich sage in wes.
wol vierzec jâr hab ich gesungen oder mê
von minnen und als iemen sol.

「私は四十年かそれ以上、ミンネのうたを歌つて来た」といふ
て、自己に対する敬意を要求してゐることも知られるやうだ。
ワルターは生涯、ミンネザングをうたつてきまなかつた。フールダ
への労作 (Konrad Burdach: Reinmar der Alte und Walthar

von der Vogelweide. Halle, 2. Aufl. 1928) の示す如く、

インマル・フォン・ハーゲナウ流の在来のミンネザングの形式から出発したワルターが、彼独自の詩的世界の展開には至らぬまでも、師ラインマルに対して既にその独自性を主張した初期の作品から、その円熟期に及ぶまでミンネザングから離れてしまうことはなかつた。宮廷人としてワルターが *Minnelyrik* をもつて自己本来の使命とみていたことは当然のことであつたらう。ワルターにおけるミンネザングの意義は何か。『菩提樹の下の乙女』(Under den Linden) に描かれるように、ワルターは身分低き若く素朴な乙女に対する清純な愛、いわゆる「低きミンネ」(Niedere Minne) をついたのであるが、彼は社交的遊戯である *Gesellschaftlyrik* の古く伝統に束縛されたミンネザングを解放して、個性的な抒情詩に高めあげ、真実さと自然らしさを附与し、これに簡潔な表現をとりしめたことが特筆されねばなるまい。そしてこれでは *Minne* の本質に大きな変改が加えられた。この矛盾に充ちた世界を克服するために必要な欲ばしい気持を人間の心に与えるもの——それがミンネであつた。

心に憂いを抱いている人は良き女のことを思うがよい、その時こそ彼は救われるのである。ワルター以前のミンネザングに見られるような、たとえそれが高貴な諦念であるにしても、悲しみ・憂いに終る *Minne* であつてはならない。ワルターにとつて

minne ist minne, tuot si wol:

tuot si wê, so enheizet is niht recht minne.

(恋とは恋 それはたのしきもの
悲しみ混らば まことの恋ならじ)

であり、純粹なミンネとは今や二つの魂を合一せしめ、所有の祝福をもつて満たすものである。

Obe ich rehte räten künne,

waz diu minne si, sô sprecht denne ja.

minne ist zweier herzen wünne:

teilent si geliche, so st diu minne da.

(もし私が智慧を貸すならば)

恋とは何かといえば、いいたまえ

恋とは二つの心のよろこび

同じきを二人分けあえば、恋はそこにあり)

菩提樹の下の清純な乙女の魅力はこうして発見されたものと考へることが出来るであらう。

一一九八年、ワルターはウィーン宮廷の庇護を離れて、定めなき遍歴の生活に入つた——それは苦しい運命であつた。だがこの苦難の遍歴生活はワルターに幸いした。彼はこれによつて新しい創作の分野に足をふみ入れ、彼の天才が今や新たな展開をみるに至つたのだから。かくて *Spruch* の詩人としてワルターは登場するのである。

ワルターの *Spruch* はあらゆる題材を含んでいるが、就中政

政治的 Spruch といひ Spruchdichtung といひ新生面を開いたのである。Spruch については、かつて述べたことがあるので詳しい敘述は割愛するが、ワルターの Spruch の特異性は、ワルター以前の作者 Henger や多数の Spervogel と異なつて、ワルターによつて芸術的ジャンルとしての価値を与えられたことにある。元來 Spruch は教訓的 didaktisch な性格を有するものであつて、ワルターの場合にもかゝる性格は認められる。また Wahre Liebe によつて述べた Spruch (81, 31) の如く、Minnelied に限られてゐる。Spruch の詩人としてのワルターの功績は政治的 Spruch にあるのであつて、彼はこれによつて固執しかつて自由さを失つた宮廷詩に新風を送り込んだといえる。ワルターの政治詩は、また彼の内外の生活を知り、その政治的信念を考察する上で甚だ重要な手がかりを与えていることは勿論である。

さて以上恋愛詩人あるいは政治詩人としてのワルターについて簡単に述べたのであるが、宗教詩においてはどうかであらうか。ワルターは一般に宗教的であつたといわれているのであるが、彼の作品にそれがどう現れているか、果して宗教的の詩人と見ることが出来るか、これは相当問題のあるところであらう。

一切が神を中心として廻り、神との關係を離れてはその存在の意味がなかつた中世、その中世に生きたワルターが宗教的であつたことは当然考えられるのであるが、彼が実際に遺した作品から見ると、宗教的な題材によつてゐるものは極めて少ないのである。

後に述べる十字軍遠征についての二つの Spruch を除いて、宗教的題材を取扱つた唯一の作品は Leich (31) である。

こゝで Leich なる詩形について、Simrock および Willmanns の説述をたよりに簡単な説明を試みてみた。Leich は元來中世初頭の頌歌風の宗教歌である反覆歌 (Sequenz) から發達したもので、ザングト・ガレンの僧ノトケル・ブルルス (Noker Balbus 九一二年歿) によつて創始されたものと伝えられてゐる。それは宗教的題材を取扱うと限つたものではなく、一〇・一一世紀の頃には宮廷詩人が歴史的素材を扱つた例もある。Leich は本來 Tanz 或は Spiel を意味し、従つて舞踏歌にも用ひられ、また Minne をうたつたものもあつた (例えば Ulrich von Gutenberg の Minneleich) とつた。Leich は多くの点で Lied と異なつてゐるが、主要な相違を挙げれば、Lied が同一の構造・旋律を持ち、多くの場合詩節毎に詩に盛られた思想内容が完結するのに対して、Leich は異なる構造と旋律とをもつ詩節が反覆され、思想内容も交錯するという複雑な、變化に富む詩形である。Leich は従つて華やかな感じを与えると共に、他方技巧に陥りやすいという欠点を持つてゐる。

ワルターはこの技巧的に甚だ困難な Leich を生涯に一度しか試みていない。そしてそれは宗教的題材を取扱つた、外形的にも内容的にもすぐれた作品となつてゐる。古くから行われた聖母崇拜 (Marienfrömmigkeit) が、こゝにおいて豊かな表現を見出している。二十九節、百五十行余に及ぶ大作で、こゝにすべての内容を紹介する余裕はないが、一応その内容を辿つてみたい。

ワルターの Leich はその内容から二部に分けることが出来よ

う。第一は聖母讚美であり、第二は神の恩寵と人間との關係であり。

Got, diner Trinitâte,
die ie beslozzen hâte
dîn fîrgedanc mit râte,
der jehen wir, mit drîunge
diu drie ist ein einunge,

leich はまます三位一体の告白で始まる。神よ、汝の御教えをわれらにおへり給え。(31—39)

uns hât verleitêt sêre
die sinne tîf mange sînde
der fûrste tûz helle abgrînde.
Sin rât und bloedes fleisches gir
die hânt geverret, hêre, uns dir.

悪魔の誘惑と弱き肉体の欲望とがわれらを諸々の罪に導き、主よ、汝よりわれらを遠ざけた。汝よ、彼らを汝の力もて滅ぼし給え。その時、汝の御名の称えられんためた。(39—27)
ちつ次に聖母マリヤの讚美。救世主の母なる聖母マリヤよ、われらのために天上の慰めをおへり給え、ちつば聖母の御名は称えられん。(3,28—5,18)

Nû bîen wir die muoter

und ouch der muoter barm,
si reine und er vil guoter
daz si uns tuon bewarn :
wan âne si kan niemen
hie noch dort genesen :
und widerredet daz iemen,
der muoz ein tôre wesen.

聖母マリヤとクリストよ、われらに守護を垂れ給え。なぜなら彼らなくしては何人も、この世でもあの世でも幸福たり得ないからである。若しこれを否定する者あらば、それは愚者に違いない。(5,19—6,6)

聖母讚美が終つて、第二部ともうひとつの章においては、人間は悔つてよつて神の恩寵をさかぬことが出来るのであると、悔悟りうへの必要性が述べられる。

Wie mac des iemer werden rât,
der umbe sine missetât
nîht herzelicher riuwe hât ?
sit got enheime sînde lât,
Die nîht geriuwent zaller stunt
hin abe unz tîf des herzen grunt.

己の過ちを心から悔いない者が、どうして救われ得ようか。神は常に心の奥底から悔悟した罪でなくてはお赦しにならないのだ。

から。しかしわれらには悔悟の能力は備わっていない。

sin geist der vil gehiure

Der kan wol herten herzen geben

wäre riuwe und reinez leben.

われら人間には聖靈の助力が必要である。聖靈のみが頑なに真の悔悟を与え、罪の重荷を軽くすることが出来るのである。なれば父なる神と御子キリストよ、われらに真の聖靈を遣わし給え。(6.7—6.29)

全キリスト教界は地に墜ちて、非キリスト性が充満している。キリスト教は病の床に臥し、人は皆、かつてローマから得ることの出来た真の教えを渴望している。この悩みはローマを支配している Simonie のためである。(6.30—7.2)

swelch kristen kristentuomes gih

an worten, und an werken niht,

der ist wol halp ein heiden.

daz ist unser meiste nôt:

daz eine ist an daz ander töt:

nû sture uns got an beiden,

口舌のみで実際の営みを伴わないキリスト教徒は半ば異教徒のようなものである。これがわれらの最大の悩みであつて実行を伴わぬ言葉は生命を持たない。神よ、われらにこの二つを得なせ給え。(7.3—7.16)

再びマリアにたち返つて、汝、恵み深き聖母マリアよ、われらがために神の正しき怒りをやわらげ給え。汝の執りなしが *der barnunge ursprunge* (*Urguell der Barmherzigkeit*) すなわち神の御許に届くよう恵みを垂れ給え。かくてわれらの負える重き罪が軽くなることも確信されるのである。われらの過失に対するたえざる悔悟により罪を洗い落すやうに助け給え。悔悟は神と汝をおいて与えるものはない。(7.16—8.3)

以上がワルターの *Leich* の梗概である。三位一体の祈りに続く聖母マリアの讚美が全体のほぼ半ばを占めている。この讚美は、無垢受胎、すなわち神が御子イエス・キリストとして現れるといふ最大の奇蹟に捧げられているのであり、従つてこゝに用いられた譬喩・形容はいずれも伝統的なもので、既にワルター以前の中世詩にも使用されて来たものである。その多くが旧約聖書から選ばれてゐる。マリアに關するもののみを挙げると *da bliende gert Arônes / uf gænder morgenrot / Ezechîles porte / balsamite / margarite* など。

聖母讚美の部分を除くと、あとは三位一体・真の悔悟の不可欠の如き在来の信仰告白であつて、ワルター独自の宗教的告白といふべきものは認められないのである。

宗教的内容をめぐり Spruch の 10, 10.1 以下

Mehtiger got, dû bist sô lanc und bist sô breit,

gedæht wir dà nâch, daz wir unser arebeit

verlîren! dir sint ungemezzen maht und êwekeit.

ich weiz bi mir wol daz ein ander ouch dar umbe

[trahet:]

sô ist ez, als ez ie was, unsern simen unbereit.

dû bist ze grôz. dû bist ze kleine: ez ist unghatet.

tumber gouch, der dran betaget oder benahet!

wil er wizzen daz nie wart geprediet noch gepfahret?

(大いなる神よ、汝は広大である、

われらがそれを考えるのは無益なほど。

汝の力と永遠とははかり難い。私は知つてゐる、それを考え

あぐむ者があることを。

それは今も昔もわれらの五官の及ばざるところ。

汝は余りにも大きく余りにも小さく、それは捉え難い。

そのために日夜をつくすは愚かな痴者。

説教でも教義でも究明されないものを知ろうとするのか。)

偉大なる神はわれわれによつて把握され得るには、あまりに巨大であり、また同時に余りにも小さい。日夜徒らに思索する者は愚者である。こゝには神の探究しがたいことが述べられると同時に、ワルターは人間の悟性による神性の思考を拒否しているのである。彼がドグマ的、神学的思辨を断乎却けていることによつても、ワルターのクリスト教の教義に対する厳しい態度を認めることが出来る。また先に述べた *Leich* において

言葉だけでクリストを信じ

実際の営みでそうしない者は

半ば異教徒のようなものである。

これがわれらの最大の悩み

実行のない言葉は生命のないものだ。

とつてゐる。人間は常に神の恩寵を得べく努力しなければならぬが、神の本質や営みは探究すべからざるものを有してゐる。だがワルターは、*Leich* において聖母マリアと神の子イエス・クリストによる人間の救済を述べてもいる。この救済思想によれば、聖母と神の子とは人間存在と全く隔絶したものではなくて、常に人間を救うものと解されているのである。

神の恩寵——これは如何にして獲得されるか。こゝでわれわれはワルターの、所謂 *Reichsspruch* を想起せざるを得ない。彼はその第一の *Spruch* すなわち *Ich saz uf eine steine* (8,4) において、岩上に坐してこの世に生くべき道を思いあぐんで、憂いに沈む詩人の姿を描き出し、次のように云つてゐる。

朽つることなき三つのものを

いかにして手に入るべきぞ

思い悩めど詮すべもなし

その二つは名譽とこの世の財たから

そは互に傷つくることなきにあらず

残る一つは神の恩寵にして

先の二つにまさるもの。

詩人は一つの深刻な問いに捉えられている。すなわち名譽 *dre*

浮世の財 varnde guot として神の恩寵 gotes hulde は如何にして合やすことが出来るかと。詩人の答は否定的である。この driu dinc を一つの函におさめることは出来ない。神の恩寵が名譽や財と共に人の心に入り来ることは望めない。平和と正義が阻害されている限り、この三つの者が一つになることはあり得ない。更にこの平和と正義は不実と暴力とが人間を支配している間は、恢復することはあり得ないのである。人間は名譽と財とを獲得せんと努めているが、その努力において暴力と不実とを行使せざる限りに於てのみ、二つにまざる神の恩寵をうけ得るのである。この第一の Reichspruch と連関して、第二の Reichspruch すなわち Ich hörte ein wazzer diezen (8,28) に於て

daz wilt und daz gewürme
die stritent starke stürme,
sant tuont die vogel under in;
wan daz si habent einen sin:
si dñhten sich ze nihte,
si enschüefen starc gerichte.

(野獸と虫けらは

激しい斗争を行っている

小鳥の間でもそれは同じだ

強力な法の秩序が作られなければ

自らの破滅だという

このことだけは一致している。)

と云つてゐるやうに、ワルターの考えによれば自然界には野獸た

るとまた小さな虫や鳥たるとを問わず、すべての創造物に永遠の闘争が行われている。人間も他の創造物と異なるところはない。この永遠の斗争は神の欲し給うものではあるが、人間の生活には確固たる統一の支配が必要である。人類が ze nihte 絶滅してしまわなためには、正義と秩序とが保たれねばならない。そして国家が、皇帝のみがこの混沌を支配する秩序たり得るとワルターは考えるのである。この Spruch は直接的にはフィリップ・フォン・シュワーベンに対する、帝位につけという呼びかけであるけれど、この詩の内蔵する深い思想はワルターの倫理的世界観を端的に示すものである。

ワルターの教皇に対する激しい斗争は、幾つかの Spruch から知ることが出来る。そして前述の Leich に於ても、全クリスト教界の病弊の根源を Simonie に求めているが、このような教皇権に対するワルターの態度は、今述べた彼の根本的立場からすれば必然性を持つものであらう。Leich においては聖母讚美に続いて悔悟の必要なことが述べられた後に、甚だ現実的な教皇攻撃に移るので、いさゝか唐突の感を免れないが、これは現実に対して常に明確な反応を示した現実的詩人ワルターとして当然なことであると思われる。ワルターがこゝに Simonie を持出したのは、勿論悔悟の不可欠と連関させて教皇を皮肉つたものとも考えられるであらう。Leich はこの点では政治的 Spruch に共通なものを持つてゐることは注目されるべきであらう。しかし Leich にはワルターの真率な宗教感情の表白を思わしめる点が乏しいことは認めねばならないであらう。

ワルターの作品のうちで、特異な地位を占めている二つの

Krenzlied 十字軍歌 VII sîeze wære minne (76,22) 及び
Allerêrst lebe ich mir werde (14,38) については別の機会に
述べたことがあるので、ここでは当面の問題に関連して次のこと
だけ云っておこう。前者は、当時の十字軍参加勧誘のための説教
に基礎をおくものであつて、十字軍に参加する人々のために作詞
された合唱用のもの、後者は聖地に達した巡礼者の歌になつてい
る。ワルターは一二二二年以後、十字軍遠征に旺盛な関心を示し
ていて、海を越えて聖地の土を踏むことは多年の宿望であつたこ
とが想像される。第二の Krenzlied の冒頭に見られる

今ぞわれ価値ありて生く

—わが罪深きまなこ—

人みなこのほめたとうる

聖き地を見れば。

久しき願いの叶いて

われは来ぬ

神、人の子として歩み給いし地に

を、ワルターの個人的体験と見るべきかは問題のあるところであ
る。今日では第一のものと同じく、恐らく多数の十字軍参加者の
ために作られたものであろうというのが通説になつてゐる。とい
うのは、この Krenzlied から感取される詩人の、聖地を踏んだ
喜びには何ら感情の昂揚が見られないからである。次に

Mit sælden niuzeze ich hiute ûf stên,

got hêre, in diner huote gên

und rîten, swar ich in dem lande kêre.

.....

Krist hêre, laz mir werden schin

die großen kraft der guete din,

unt pflic min wol dur diner muoter êre: (24,18)

(祝福もぎて今日われをたしめ給え。

主なる神よ、われいずこに行かんとも

汝の庇護の下に騎り行かしめ給え。

.....

主クリストよ、豊けきその御心を

われに示し給え。汝の御母のために

われを受けとらせ給え。.....)

これは旅の祝福 Reisesegen をうたつた美しい詩であり、宗
教的内容のものでは敬虔な感情の最も素朴に表現されたものとい
えるであらう。

ワルターの晩年において特に注目を惹くのは「魂の淨福」とい
らことが云われていることである。それは最晩年に属する作品と
考えられるが、五節からなるかなり長い詩である。その最後の節
に、

Min sêle niuzeze wol gevarn !

ich hân zer welte manegen lip

gemachet frô, man unde wip :

künd ich dar under mich bewarn !

lobe ich des lîbes minne, deis der sâle leit:

si gihrt, ez si ein lûge, ich tobe.

der wâren minne gihrt si ganzer stætekeit,

wie guot si si, wies iemer wer.

lîp, lâ die minne diu dich lât,

und habe die stæten minne wert:

nich dunket, der dû hât gegeret,

diu si nîht vîsch unz an den grât. (67,20—67,31)

(わが魂に幸あれ—)

私はこの世で男女多くの人を喜ばせた。

自分の魂を守ることも出来たのに！

だが私が肉体のミンネをほめれば、魂が悲しむ。

それは偽りであり、私は氣違いだと言はう。

真のミンネが不変であり、立派で永遠だと言はう。

肉体よ、お前を捨ててミンネを捨てよ。

そして不変のミンネを尊重せよ。

私には、お前が望んだものはまやかしの物のように思われる)

ワルターの後期の作には、次第に憂愁の影が濃くなつてゆく。

それは益々混沌としてゆく時代の体験に基づくものであり、世界の状態に対する歎き・絶望・苦惱がその作品に刻印されてゆくのである。作品 59, 63 において「お前がどんなに急ごうとも、私がお前と別れるのは先のことだ」とよびかけたものの Frô Walt (浮世夫人) に、ワルターは痛切な別離をなしたのである (100, 24)。浮世夫人に誘惑された詩人は、「ワルターよ、そなたは故なくし

て怒りてゐる」といつて引止める浮世夫人に対して

Frô Welt, ich hân ze vil gesogen :

ich wil entwonen, des ist zit.

din zart hât mich vil nâch betrogen,

wand er vil siezer frôiden git.

do ich dich gesach reht under ougen,

dô was din schoene an ze schowen winneclîch al

[sunder lougen :

doch was der schanden alse vil,

dô ich din hinden wart gewar,

daz ich dich iemer schelten wil.

(浮世夫人よ、私は余り乳を吸い過ぎたようだ。

私はそれを止めようと思ふ、今がその時だ。

そなたの愛撫に瞞されるところだった。

何故ならそれは多くの甘美な喜びを争えるから。

そなたをまともに見ると

そなたはまことに美しかった。

だがそなたの背中に気がつくとき

永遠にそなたを罵るであらうほど

無気味なものに溢れていた。)

そして最後の第四節において

'Sit ich dich nîht erwenden mac,

sô tuo doch ein dinc des ich ger :

gedenke an manegen liehten tac,
und sich doch underwiltent her
niunwan sô dich der zit betrage.

daz tætz ich wunderlichen gerne, wan diich fürhte
[dine lage,

vor der sich nieman kan bewarn.

got gebe in, frowe, guote nacht:

Ich wil ze herberge varn.

〔あなたの氣持を憂えさせられないのなら

一ツだけ私の願いをきいておくれ。

あなたが退屈した時だけでも

楽しかつた幾日かを思い出して

時には顔をみせておくれ。〕

どんなにか私もそうしたい、

だが、誰も逃れることの出来ないそなたのわなが恐い。

夫人よ、お休み。

私は猶へ行こう。〕

ワルターは、かつて婦人の美しさを、ミンネを、喜びをうたつた浮世に、欺ける女の厭うべき醜惡な背中を認めたのである。この作品にはワルターの彼岸への逃避の開始が感ぜられるであろう。浮世の幸福の空しさはこの他の作品にも云われているが、要するに世俗的な愛を離れて、次第に神へと導かれてゆくのである。

宗教心と世俗的生活すなわち Gott-Welt の問題は、中世に特

有な段階論的思想となつて現われた。段階論すなわち Gradualismus は、スコラ派の哲学によつて完成された教説であり、世俗と神との關係は大よそ次のように定義される。この地上の一切のものは神との関連において考えられ、それが神によつて課せられた使命を果す限りにおいて、完全な可能性を有する。即ち世俗は單に否定されることはなくて、世界の一切のものが神との關係におかれるのである。更に世界は段階的に上昇してその各段階において神の委託を果すとき、神に到達し得る。Gott-Welt の問題は、中世文学の理解のために極めて重要なテーマであり、この二つが如何に調和されているかはワルターの場合にもすこぶる重大な問題を投げかけているように思われる。

ワルターは齡を加えると共に宗教的になつて行つたことが認められるのだが、ウォルフラムにおける如く、世俗生活と宗教心とが綜合された境地に達していたのであろうか。ワルターにあつては、むしろ世俗生活と宗教心とが対立しながら、徐々に彼岸へと引かれていつたと見るのが適當であらう。

彼の作品自身、宗教的素材によるものが極めて少数であつて、宗教詩人とは勿論いうことは出来ないけれども、それは彼が絶えず現実に活潑に反応を示す現実的性格の人間であり、何よりも倫理的な——倫理的という時、これすらクリスト教の基礎に立つものであることはいふまでもないが——人間であつたためである。